

がんサバイバーシップ研究助成金  
研 究 報 告 書  
(平成 27 年度)

平成 28 年 4 月 30 日

公益財団法人 がん研究振興財団  
理事長 高 山 昭 三 殿

研究施設 国立がん研究センター

住 所 東京都中央区築地 5-1-1

研究者氏名 八巻知香子



(研究課題)

視覚障害がある人のがん情報収集の実態と対応策に関する研究  
(課題テーマ (12) がん患者の情報収集の実態と改善策に関する研究)

---

平成 27 年 7 月 8 日付助成金交付のあった標記研究課題について研究が終了致しましたのでご報告いたします。

## 視覚障害がある人のがん情報収集の実態と対応策に関する研究

(課題テーマ (12) がん患者の情報収集の実態と改善策に関する研究)

研究代表者：八巻知香子（国立がん研究センターがん対策情報センター）

研究分担者：小畠知志（堺市健康福祉局障害施策推進課）

研究協力者：原田敦史（堺市立健康福祉プラザ視覚聴覚障害者センター）

高橋三智世（堺市立健康福祉プラザ視覚聴覚障害者センター）

王田桂子（堺市立健康福祉プラザ視覚聴覚障害者センター）

### 1. 本研究の目的と概要

健康・医療に関する情報はすべての人が享受できるべき権利であり、主要先進国においてがんは死因の第一位を占めていることからも、すべての国民に向けたがんに関する情報提供の必要性は広く指摘されている。障害者は一般の人以上に健康上のニーズを多く抱えている場合が多く（Carroll, 2014）、例えば、オーストラリアにおいては、障害のある人が健康を維持するための各種サービスにアクセスできない現状があり、権利の観点からのみならず、労働力の減少と社会保障費増につながるという観点からも取り組みの必要性が認識されている（Smith, 2000）。

しかし、一般向けに提供されている健康医療情報は、障害のある人々が利用できる情報はきわめて限られているのが現状である（Kreps 2005）。紙媒体など普及している媒体では利用できない等の物理的制約、その人にとって理解可能な言語・表現で伝えられていないといった内容での制約により、自らの命や健康に関する情報が、本人のわかる形では届いていないことが指摘されている（Gustafson et al. 2005）。がんに関して国民・市民に対する情報提供の必要性については、米国では社会的不利な状況における人々に対して意識的な介入を行う必要性が認識され、米国立がん研究所により 2000 年代に大規模な介入パイロットスタディが行われた。この結果からは、新たに情報を書き上げるよりは、既存の情報を使いやすい形で提供することが現実的であること、普及にあたっては日常の生活の拠点から発信される必要があることが報告されている。

健康医療情報に関して、わが国でも同様のニーズがあることは明らかであり、具体的な取り組みが必要であると考えられるが、これまでのところ公表されている資料は皆無である。

がんは 1981 年以降、わが国の死因の第一位であり、がんに関してすべての国民に十分な状況を提供することが求められていることは言うまでもなく、国立がん研究センターがん対策情報センターが運営する「がん情報サービス」などの情報提供は患者や家族からも一定の評価を受けている（W）。しかし、情報弱者となりがちな障害者への対応は、2012 年に国立がん研究センターが堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センターと協定を結び音訳、点訳資料の提供の取り組みをはじめたが（国立がん研究センター, 2012）、まだまだ不十分な状況にある。平成 28 年 4 月に障害者差別禁止法が施行され、日本の各機関は具体的に対

応を迫られている時期でもあり、全国的にも早急な対応方法の提案が必要である。本研究では、がん情報の提供にあたり、特に情報弱者となりやすい、視覚障害のある人に焦点をあて、視覚障害のある人が必要とするがん・医療情報のニーズ、入手の困難を社会背景別に検討することで、実態を明らかにするとともに、各セグメントに対して行うべき情報提供方法を検討する。

## 2. 研究方法

筆者らは 2015 年 3 月、堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センター点字図書館登録者ならびに堺市視覚障害者協会会員 311 名に郵送調査を行い、情報入手の困難が発生していること、しかしこれらのサービスに繋がっている人は一定の情報入手が可能となっていること、ゆえにサービスから切り離されている方々の実態が必要であることを明らかにした（八巻他、投稿中）。よって、本研究においては、上記障害者サービス、団体を利用していらない、視覚障害者を対象とすることとした。

堺市全 7 区において視覚障害により身体障害者手帳をもつ 2245 人のうち、某 2 区に住み、堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センターならびに堺市視覚障害者協会への登録がない、492 人を調査対象とした。この 492 人に調査票を郵送したところ、86 票が宛先不明として返送されたため、実質の配布数は 405 票であった。154 票が回答・返送され、回収率は 38.0% であった。

調査票は拡大文字で印刷し、依頼状と回答方法については点字用調査票、音声版調査票についても準備していること、電話回答も可能であることを付記し、点字版も同封した。

## 3. 研究結果

本報告書では、この調査結果を「堺市手帳保持者調査」と記載し、各質問への回答結果を「資料編」に示した。

### (1) 回答者の背景

年齢は 20 代から 90 代まで幅広く分布したが、70 歳代が最多であり、男女比は男性 44.2%、女性 55.8% であった（問 1）。障害をもった時期は、最も多いのが 60 歳～70 歳未満で 20.4%、50 歳～60 歳未満 19.0% とあわせて 4 割を占め、出生時、10 歳未満、20 歳未満をあわせても 2 割ほどであった（問 2）。

障害者手帳の等級は 1 級が 28.2%、2 級が 34.2%、3 級が 37.6% であり（問 3）、障害による経済的な苦労について、「そう思う」が 33.6%、「ややそう思う」が 28.3% とあわせて過半数に達した（問 4）。日常の情報入手は、質問紙の選択肢の中では墨字を使う人が 27.7%、インターネットが 12.3% の順に多く、DAISY（デジタル録音図書）、録音テープ、点字を使う人はそれぞれ 4.6%、7.7%、点字 2.3% とごく少数であった（問 5）。インターネット上の点字図書館である「サピエ」を利用している人は「いつも」「ときどき」をあわせて 3.3%（問 6）、堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センターを知っている人は 19.2% に留ま

り（問7）、堺市外の点字図書館を知っている人は1.3%のみであった（問8）。また、堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センターへの登録を希望する人は15.8%いた（問9）。

移動については、慣れない場所も含めてほぼ単独外出が可能な人が19.6%、慣れた場所であれば単独外出が可能な人が33.8%、常に付き添いが必要な人が44.6%と状況が三分された（問10）。就労状況については、仕事をしていない人が79.6%と圧倒的多数であった（問11）。同居家族については、配偶者との同居が過半数の53.6%、子どもとの同居が32.7%、ひとりぐらしが22.9%であった（問12）。

## （2）健診・検診の受診状況、健康状態と健康情報の入手源

過去一年に健康診断や人間ドックを受けた人は41.7%であった（問13）。

対策型がん検診の対象である胃がん、肺がん、子宮頸がん、乳がん、大腸がんの検診についてみると、過去1年間に受けた人はそれぞれ24.6%、32.9%、13.1%、14.4%、32.6%であった。それぞれの検診対象の性別、年齢に限ると、同様に30.2%、32.1%、30.0%、31.0%、35.3%であった（問15）。

健康診断を受けなかった理由としては、「心配な時はいつでも医療機関を受診できるから」が47.7%で最も多く、次いで「そのとき、医療機関に入院・通院していたから」が33.8%、「費用がかかるから」が13.8%と続いた。障害による理由「ガイドヘルパーや付添いの手配が大変だから」は7.7%、「医療者が障害に対して適切な対応をしてくれないと思うから」が4.6%、医療機関が障害に対応してくれないと思うから」が3.3%であった（問14）。

がん検診を受けた理由としては、選択肢としては「自覚症状を感じたから」が最も多く25.4%、次いで「市役所・保健センターなどからの通知があったから」が23.7%であった（問16）。がん検診を受けなかった理由としては、「必要な時はいつでも医療機関を受診できるから」が49.4%で最も多く、次いで「毎年受ける必要性を感じないから」が15.7%、「知らなかつたから」が16.9%であった。「医療機関が障害に対応してくれないと思うから」「医療者が障害に対して適切な対応をしてくれないと思うから」「ガイドヘルパーや付添いの手配が大変だから」を挙げた人はいずれも5%ほどと多くはないが、障害への対応がなされないことへの懸念を挙げた人もいた（問17）。

心身の健康尺度であるSF8得点を算出した。全回答者の平均は身体的健康を示すPCS得点が41.1点、精神的健康を示すMCSが42.88点であった。身体的健康（PCS）得点は年齢と共に低下する傾向がみられた（問18）。

健康情報に関する入手の状況についてみると、「自分に必要な健康情報がある場合に、自分で見つけることができる」と感じている人は、「とてもそう思う」4.7%、「まあそう思う」16.2%に留まった。健康情報を得る媒体としては、「テレビ」が最も多く64.2%、次いで「家族から」41.7%、「ラジオ」41.1%、「医師・保健師など専門家による指導」41.1%、「友人・知人から」25.8%、「インターネット」1.1%と続き、その他の墨字・点字・音声による媒体を挙げた人はいずれも10%に満たなかった（問20）。

病気や健康に関する相談先としては、71.3%の人が「ある」と答えた（問 21）。

### （3）がんやその他の病気になった経験と情報入手の困難

これまでにがんと診断されたことがある人は 15.2%、23 人であり（問 22）、そのうち、がんと診断された際に相談できる場があったと答えた人は 19 人であった（問 24）。がんの治療を決めるまでにほしいと思った情報を医療者が提供したと答えた人は、「十分」が 11 人、「ある程度」が 9 人、「どちらともいえない」が 2 人（問 25）、また、書籍等を含めて自分がほしいと思った情報を「十分に得られた」と答えたのは 6 人、「ある程度得られた」が 13 人と情報が得られていた人が大半であったが、2 人は「どちらともいえない」、1 人は「あまり得られなかつた」と答えた人（問 26）。がんの診断から治療開始までの状況を振りかえって、納得いく治療を選択できたと感じている人は、「そう思う」が 17 人、「ややそう思う」が 4 人、「どちらともいえない」が 5 人、「あまりそう思わない」が 1 人であり（問 27）、医療機関で患者として尊重されていると感じている人は、「そう思う」が 15 人、「ややそう思う」が 4 人、「どちらともいえない」が 3 人であった（問 28）。

がん以外の病気のために通院している人は 85.6% であり（問 29）、通院中の病気は「高血圧」が最も多く 37.4%、糖尿病が 26.7% が多く、その他多岐にわたっていた（問 30）。これらの病気のための受診している医療機関において医療スタッフがほしいと思った情報を提供しているかどうかを尋ねると、「十分提供している」が 35.2%、「ある程度提供している」が 39.6% と、提供されていると感じている人が多くを占めたが、「どちらともいえない」が 17.2%、「あまり提供していない」が 7.0%、「まったく提供していない」が 0.8% と割合は少ないながらも提供されていないと感じている人も存在した（問 31）。普段ほしいと思っている医療情報については、「十分得られている」が 16.7%、「ある程度得られている」が 37.5% と、得られていると感じている人が約半数、「どちらともいえない」が 21.7%、「あまり得られない」 16.7%、「まったく得られない」 4.2% と、得られないないと感じている人も 2 割存在した（問 32）。医療機関の受診にあたって、患者として尊重されているかどうかを尋ねると、「そう思う」 45.2%、「ややそう思う」 26.2% と割の人が尊重されていると感じていたが、「どちらともいえない」 18.3%、「あまりそう思わない」 6.4%、「そう思わない」 4.0% と 1 割の人は尊重されていないと感じていた（問 33）。

## 4. 考察

### （1）本調査の回答者の特徴

本調査の回答者は、年齢が高い人が多く、全体としては成人後、特に中高年時期になってから障害を得た人が多い集団であった。平成 23 年の厚生労働省による身体障害者手帳保持者数の統計（厚生労働省、2013）では、60-64 歳が 9.7%、65-69 歳が 10.7%、70 歳以上が 58.3% であることと比べて、年齢構成はほぼ一致した構成となっている。

また、回答者は慣れない場所への単独外出が可能な人は 2 割程度であったこと、墨字の

利用が可能な人は3割に満たないが、「堺市立健康福祉プラザ」を知っている人は2割と少なく、市外の点字図書館の利用もないなど、視覚障害者向けの福祉サービスを利用するよりは、家族などのインフォーマルなサポートを得ながら生活している人が多いことがうかがえた。今回の調査の回答は点字、電話、メールでも可能と明示していたが、すべての回答が墨字の調査票に記載されており、身近なサポートが得られる人が回答していたことが推察される。すなわち、本調査の回答者は、視覚障害のある人の年齢構成は全国的な傾向と合致するが、身近なサポートを得て生活できている人々の回答であると考えられ、サポートを得ることができず最も困難な状況にある人の状況は反映できていないと考えられる。

#### (2) 健診・検診の受診状況、健康状態と健康情報の入手源

健康診断やがん検診の受診割合は41.7%であり、平成25年国民生活基礎調査による全国値（厚生労働省, 2014）、男性67.2%、女性57.9%と比べると低い値である。年齢が高めの集団であることを考慮しても、国民生活基礎調査では、70歳代で男性58.6%、女性56.2%、80歳以上でも男女それぞれ48.1%、43.6%であり、やはり低めの値となっている。

がん検診の受診率については、対策型がん検診の主たる対象年齢に絞ると、胃がん、肺がん、子宮頸がん、乳がん、大腸がんの順に30.2%、32.1%、30.0%、31.0%、35.3%であり、これらの値は同じく成25年国民生活基礎調査による全国値と比べるとやや低く、同じ調査で算出されている大阪府の値（国立がん研究センターがん情報サービス）よりはやや高い値であった。

健診を受診しなかった理由として、「心配な時はいつでも医療機関を受診できるから」が最も多いのは、国民生活基礎調査の結果と同様であり（厚生労働省, 2014）、「医療機関に入院・通院していたから」がそれに次ぐ理由となっているところも高齢者の多い集団の特徴をそのまま反映しているといえる。健康診断・人間ドックやがん検診の未受診の理由に、医療機関や医療者の障害対応の不備への懸念、ガイドヘルパー等の手配の困難を挙げた人は少なかったが、それぞれ存在したことから、サービス提供者からの障害対応に関する情報発信も必要であると考えられる。

#### (3) がんやその他の病気になった経験と健康情報入手の困難

がんと診断されたことがある人が15%、がん以外の病気のために通院している人が86%と、本調査の回答者の多くは何らかの病気を経験している人が大多数であった。そして病気を経験した際に、大多数は医療者から情報を提供されたと感じていた。その一方で、普段ほしいと思っている医療情報については、得られていると感じている人は半数ほどであり、自分で情報を得る手段は十分に得られていない状況がうかがえた。

#### (4) 実践への示唆

「(1) 本調査の回答者の特徴」で述べたとおり、本調査の結果は家族などのインフォー

マルサポートに支えられる環境にある人の回答であることを考慮したうえで解釈する必要があるが、実践に向けては以下のような点が考えられるであろう。

まず、本調査の回答者は視覚障害者向けのサービスをほとんど利用しておらず、サービス提供施設（ここでは堺市立健康福祉プラザ）の存在もほとんど認識されていない。サービス利用の有無は本人の意向にゆだねられるべきであるが、まず、サービスの存在を知らることは重要である。また、今回の調査で堺市立健康福祉プラザへの利用登録を希望した人は15.6%であったが、これは堺市の視覚障害による身体障害者手帳保持者が約2000人であることから考えると、数百人の潜在的サービス利用希望者がいる可能性もある。本調査の回答者も、疾病等により中高年齢になってから障害を持った人が多いが、手帳取得時のみならず、その後の生活の経過の中で繰り返しサービスの存在を知らせていく努力が必要であると考えられる。

本調査の回答者は、健康情報の入手は音声を伴うマスメディア（テレビ、ラジオ）または、家族、友人・知人、医療専門家にという人を介した情報に頼っていることが明らかとなった。疾病のために通院中の人が多数であり、また病気を経験した際に十分な情報を得られたと感じている人が多かった。このことから、必要な情報は紙媒体などの情報提供だけでは十分な効果は得られにくく、日常診療で受診している開業医等との連携が必要であることが示唆される。また、市民一般に向けて障害対応が可能なサービスが展開されていることを周知し、人を介してニーズを持つ人に伝えていくことも必要であろう。

健康医療情報の普及にあたっては、行政や医療機関、福祉サービスが連携を深め、これらのニーズを踏まえた対応が求められていると考えられる。

#### 【引用文献】

- Carroll, D.D., Courtney-Long, E.A., Stevens, A.C., Sloan, M.L., Lullo, C., Visser, S.N., et al. (2014). Vital Signs: Disability and Physical Activity - United States, 2009-2012. Mmwr-Morbidity and Mortality Weekly Report, 63, 407-413.
- Gustafson, D.H., McTavish, F.M., Stengle, W., Ballard, D., Hawkins, R., Shaw, B.R., et al. (2005). Use and impact of eHealth system by low-income women with breast cancer. Journal of Health Communication, 10, 195-218.
- Kreps, G.L. (2005). Disseminating relevant health information to underserved audiences: implications of the Digital Divide Pilot Projects. Journal of the Medical Library Association, 93, S68-S73.
- Smith, R.D. (2000). Promoting the health of people with physical disabilities: a discussion of the financing and organization of public health services in Australia. Health Promotion International, 15, 79-86.
- 八巻知香子, & 高山智子 (投稿中). 点字図書館利用者・視覚障害者団体登録者における健診・検診の受診と健康医療情報入手経路の現状. 日本公衆衛生雑誌.

厚生労働省. (2013). 平成23年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）結果(表6).

[http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu\\_chousa\\_c\\_h23.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu_chousa_c_h23.pdf).

厚生労働省. (2014). 平成25年 国民生活基礎調査の概況.

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/>.

国立がん研究センター. (2012). 国立がん研究センターと堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センターとのがん情報普及のための協定締結について.

[http://www.ncc.go.jp/jp/information/press\\_release\\_20121023\\_02.html](http://www.ncc.go.jp/jp/information/press_release_20121023_02.html).

国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」. 国民生活基礎調査による都道府県別がん検診受診率データ

[http://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/dl/index.html#pref\\_screening](http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/dl/index.html#pref_screening).

## 資料編

### 視覚障害のある方の医療サービス・医療情報利用についてのアンケート

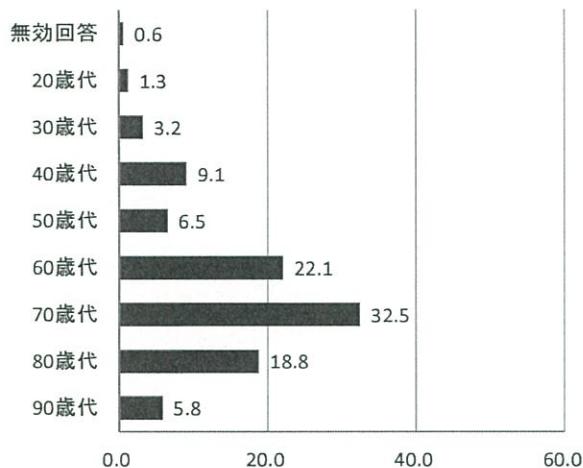
あなたご自身について伺います。

問1. 年齢と性別を教えてください。

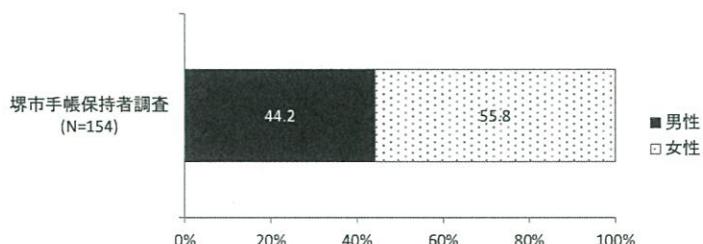
年代

堺市手帳保持者調査

(%)、N=154



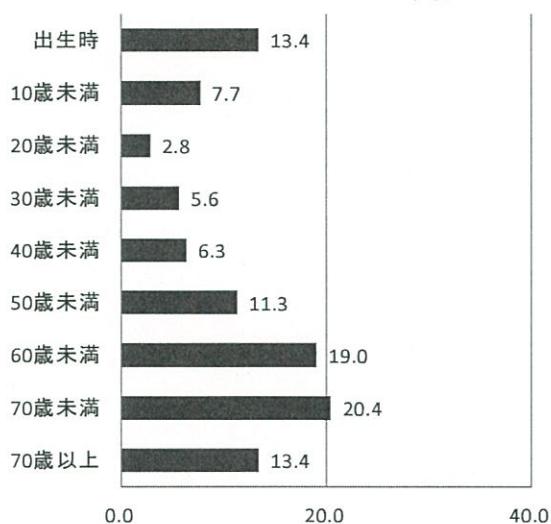
性別



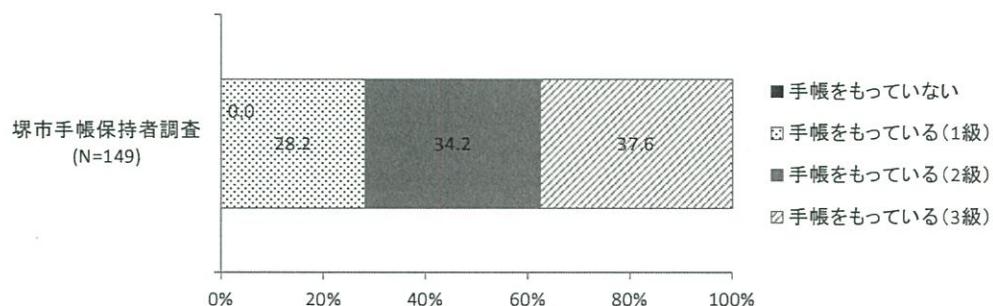
問2. あなたが障害をもったのはいつですか。

堺市手帳保持者調査

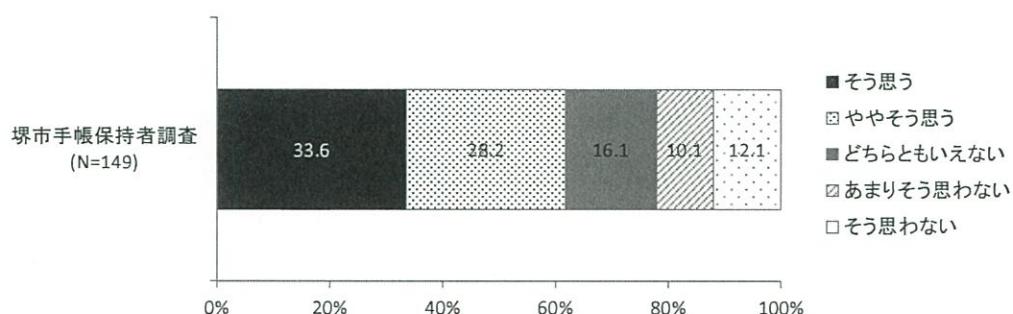
(%), N=142



問3. あなたは障害者手帳をもっていますか。持っている場合には等級を教えてください。



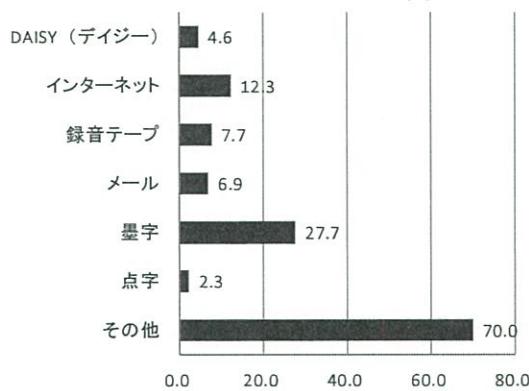
問4. 障害による経済的な苦労はありますか。



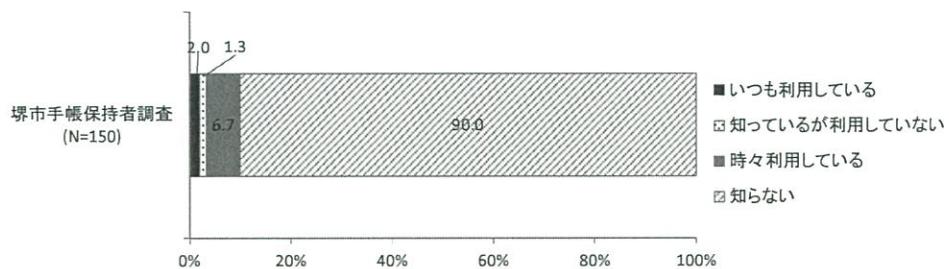
問5. あなたは日常生活の情報入手にはどのような手段を使っていますか。

堺市手帳保持者調査

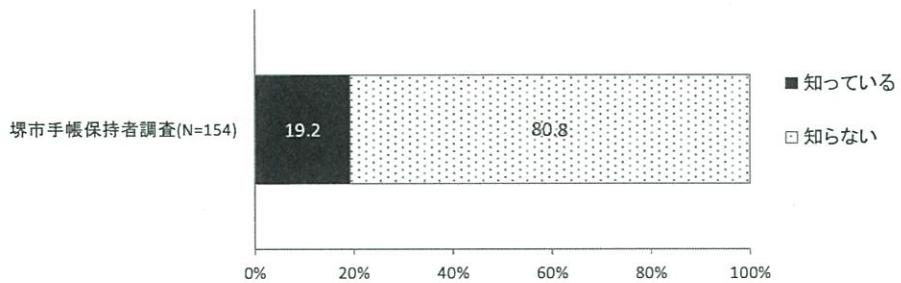
複数回答(%)、N=130



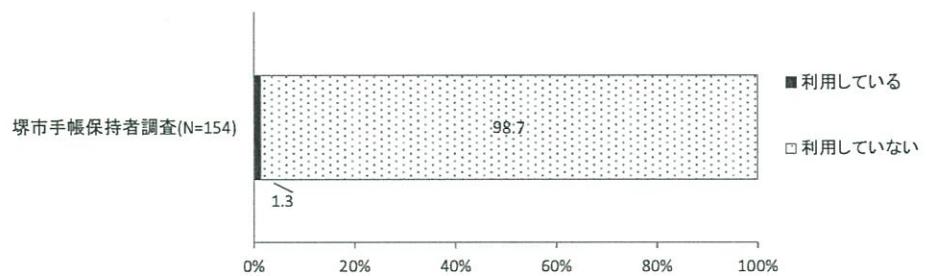
問6. あなたは、インターネット上の点字図書館「サピエ」を利用していますか。



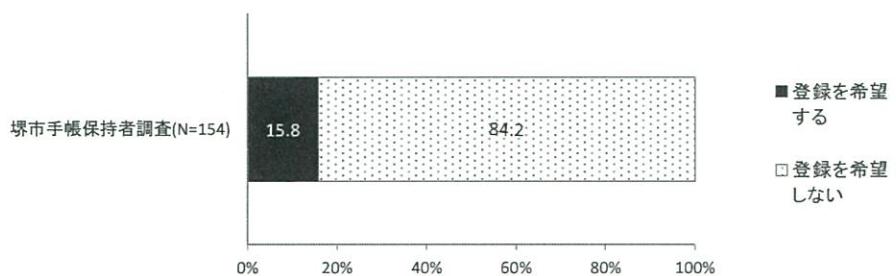
問7. 堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センター（点字図書館）をご存知ですか。



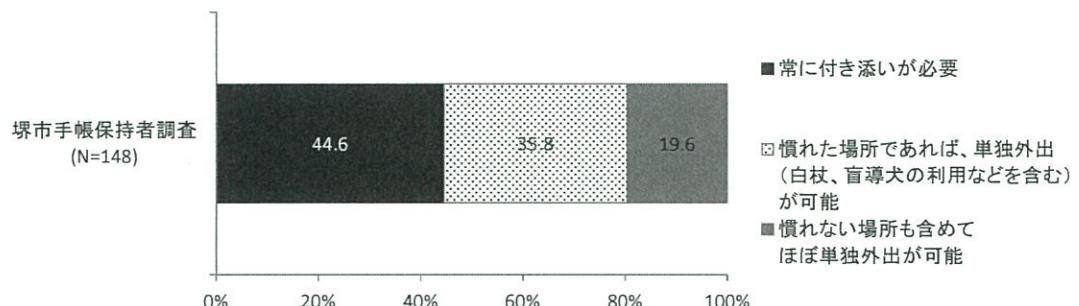
問8. 堺市外の点字図書館を利用されていますか。



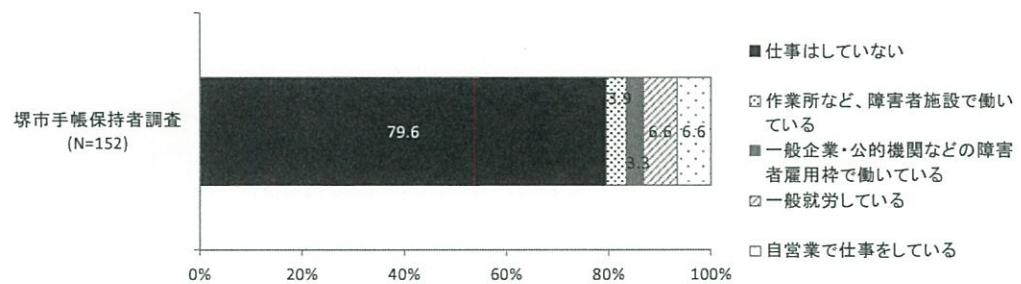
問9. 堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センターへの登録を希望されますか。希望される場合には、最終ページにお名前とご住所をお書きいただかくか、同封のパンフレットの連絡先にご連絡ください。



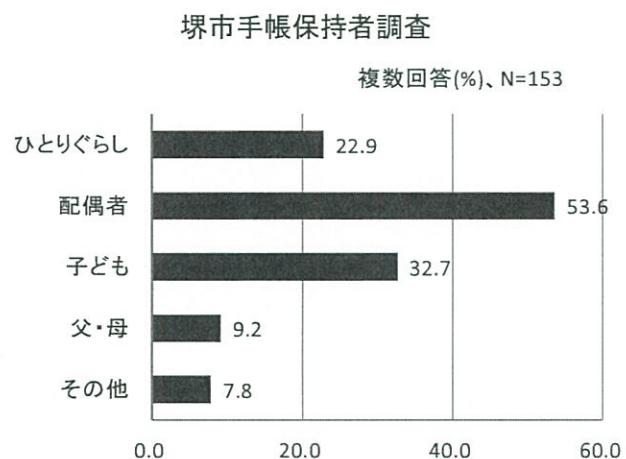
問10. あなたは、移動のとき、付き添いが必要ですか。



問11. あなたは現在、仕事をしていますか。また、仕事をしている場合にはどのような形で働いているか、あてはまるものに○をつけてください。

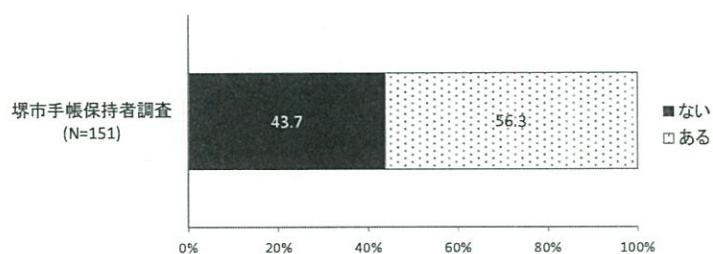


問12. あなたはが一緒に住んでいらっしゃるのはどなたですか。

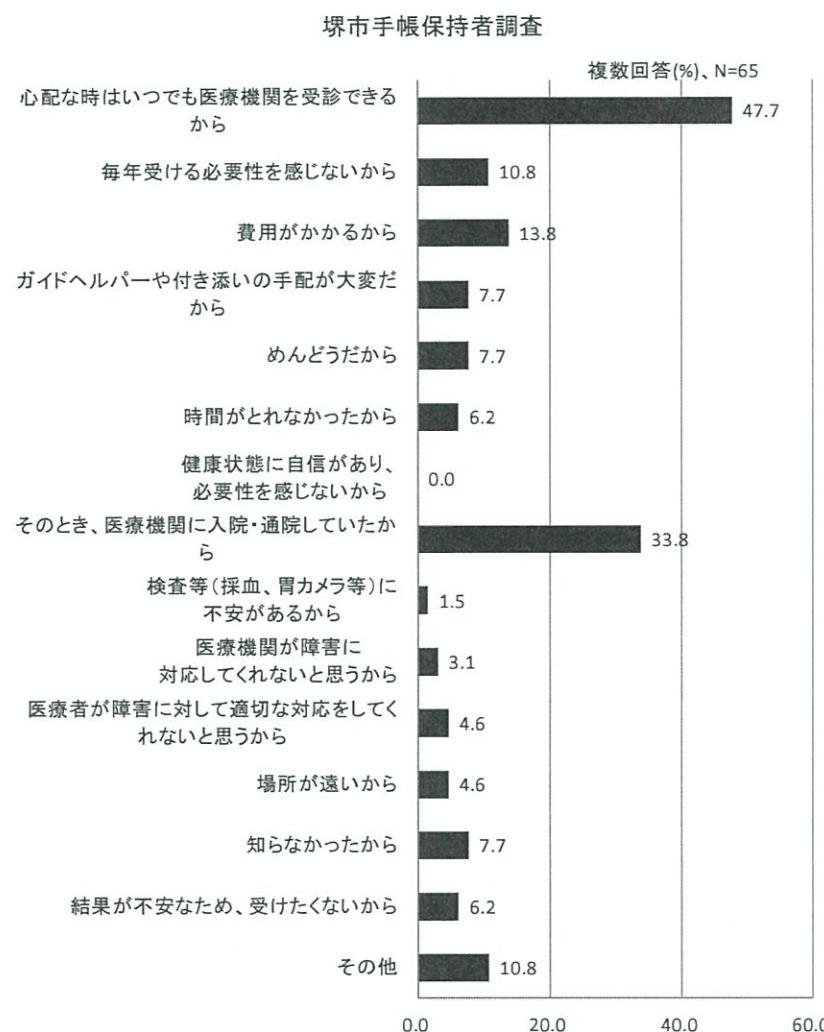


健康診断やがん検診についてうかがいます。

問 13. あなたは過去 1 年間に健康診断や健康診査、人間ドックを受けたことがありますか？

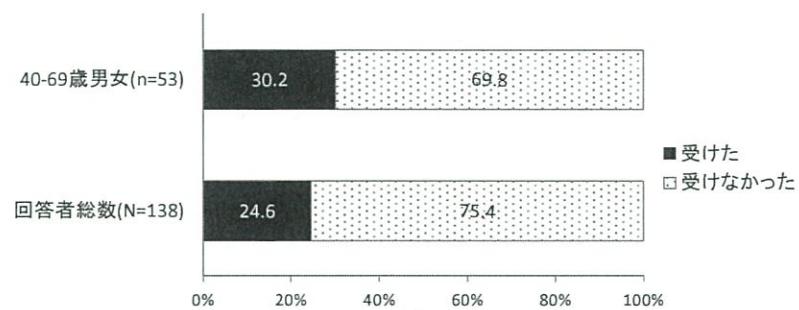


問 14. それはどのような理由で受けなかったのですか。

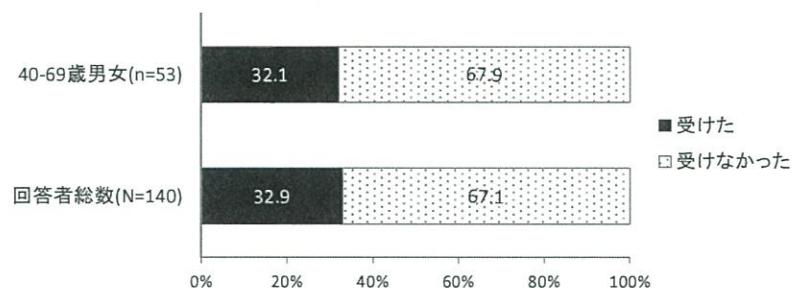


問15. あなたは過去1年間に、下記の5つのがん検診を受けましたか。

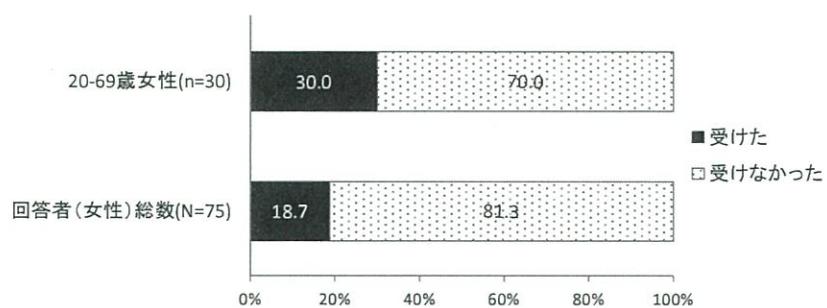
問15-1. 胃がん検診（バリウムによるレントゲン撮影や内視鏡（胃カメラ、ファイバースコープ）による撮影など



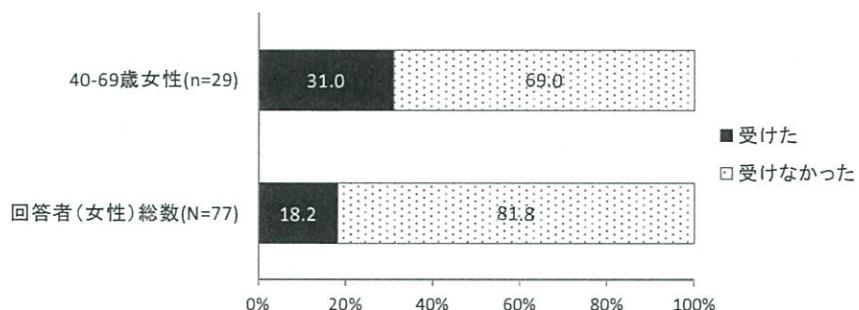
問15-2. 肺がん検診（胸のレントゲン撮影や喀痰（かくたん）検査など）



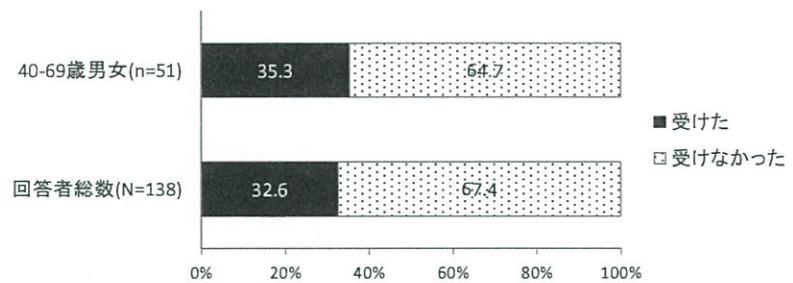
問15-3. 子宮がん（子宮頸がん）検診（子宮の細胞診検査など）



問15-4. 乳がん検診（マンモグラフィや乳房超音波（エコー）検査など）



問15-5. 大腸がん検診（便潜血反応検査（検便）など）

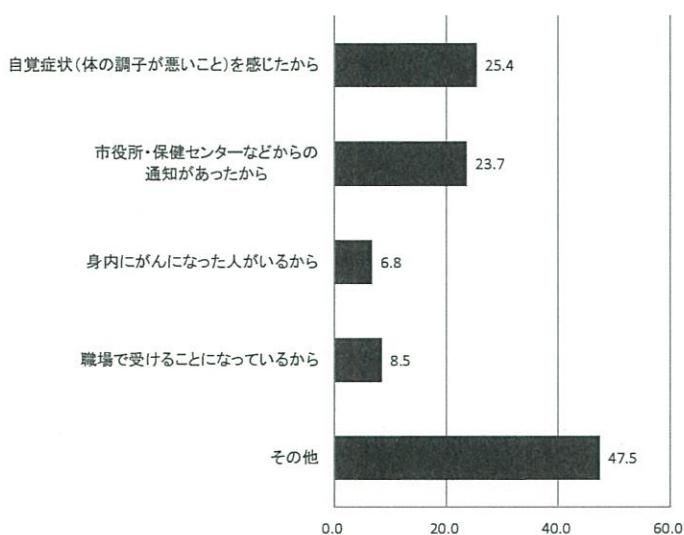


問16は問15－1～5で、いずれかのがん検診を受けた方に伺います。ひとつも受けなかつた方は問17に進んでください。

#### 問16. がん検診を受けようと思ったきっかけを教えてください

堺市手帳保持者調査

複数回答(%)、N=59

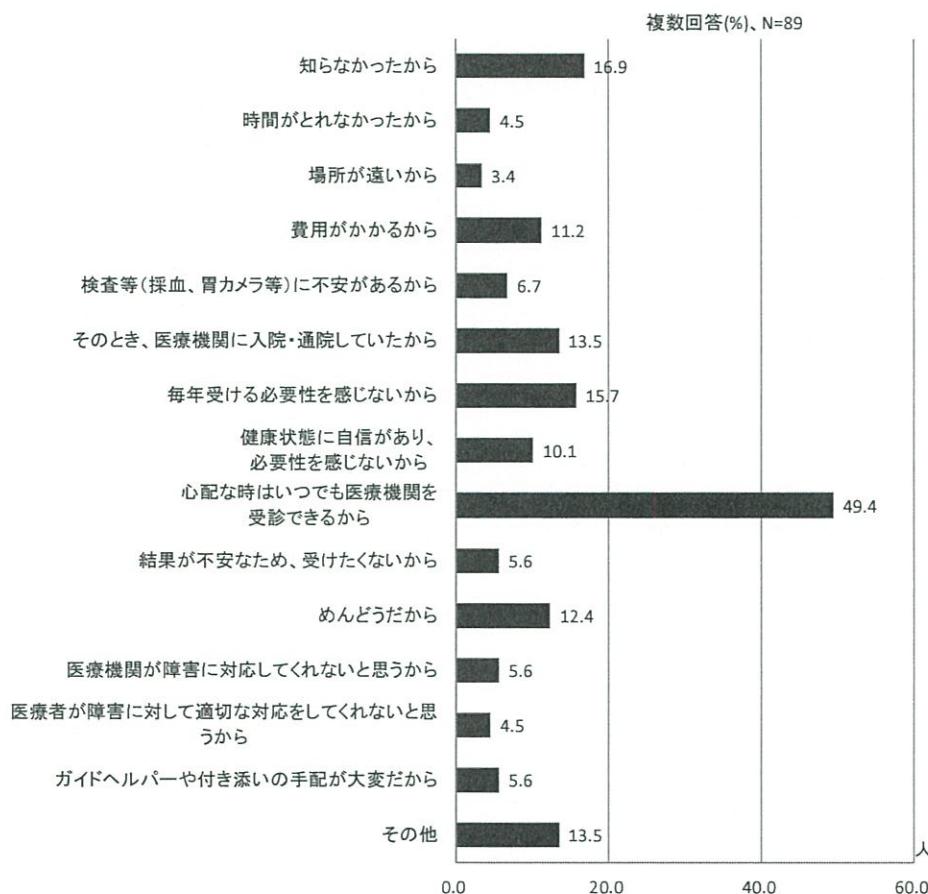


問17は問15－1～5で受けなかつたがん検診がある方に伺います。

5種類のがん検診をすべて受けた方は問18に進んでください。

#### 問17. がん検診を受けなかつた理由を教えてください。

堺市手帳保持者調査



問18. ここからはすべての方に、あなたの健康状態について伺います。

心身の健康状態 (SF8 得点)

回答者の SF8 得点

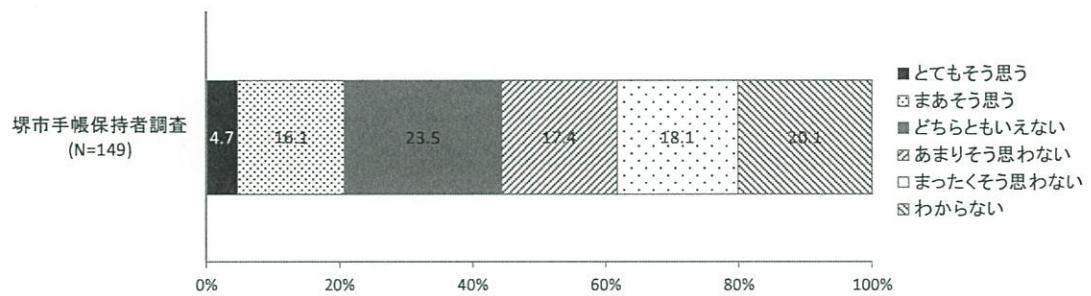
	PCS <sup>※1)</sup>			MCS <sup>※2)</sup>		
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差
全体	127	41.10	8.97	127	42.88	8.06
20 歳代	1	48.44	.	1	40.80	.
30 歳代	4	49.44	6.39	4	45.32	4.99
40 歳代	11	44.50	8.80	11	43.15	6.53
50 歳代	8	44.30	10.85	8	40.05	7.85
60 歳代	31	43.38	8.09	31	45.44	7.86
70 歳代	38	40.28	9.12	38	41.33	8.02
80 歳代	26	37.36	7.61	26	42.32	9.45
90 歳代	8	35.41	9.08	8	43.64	7.49

注) 無回答を除く

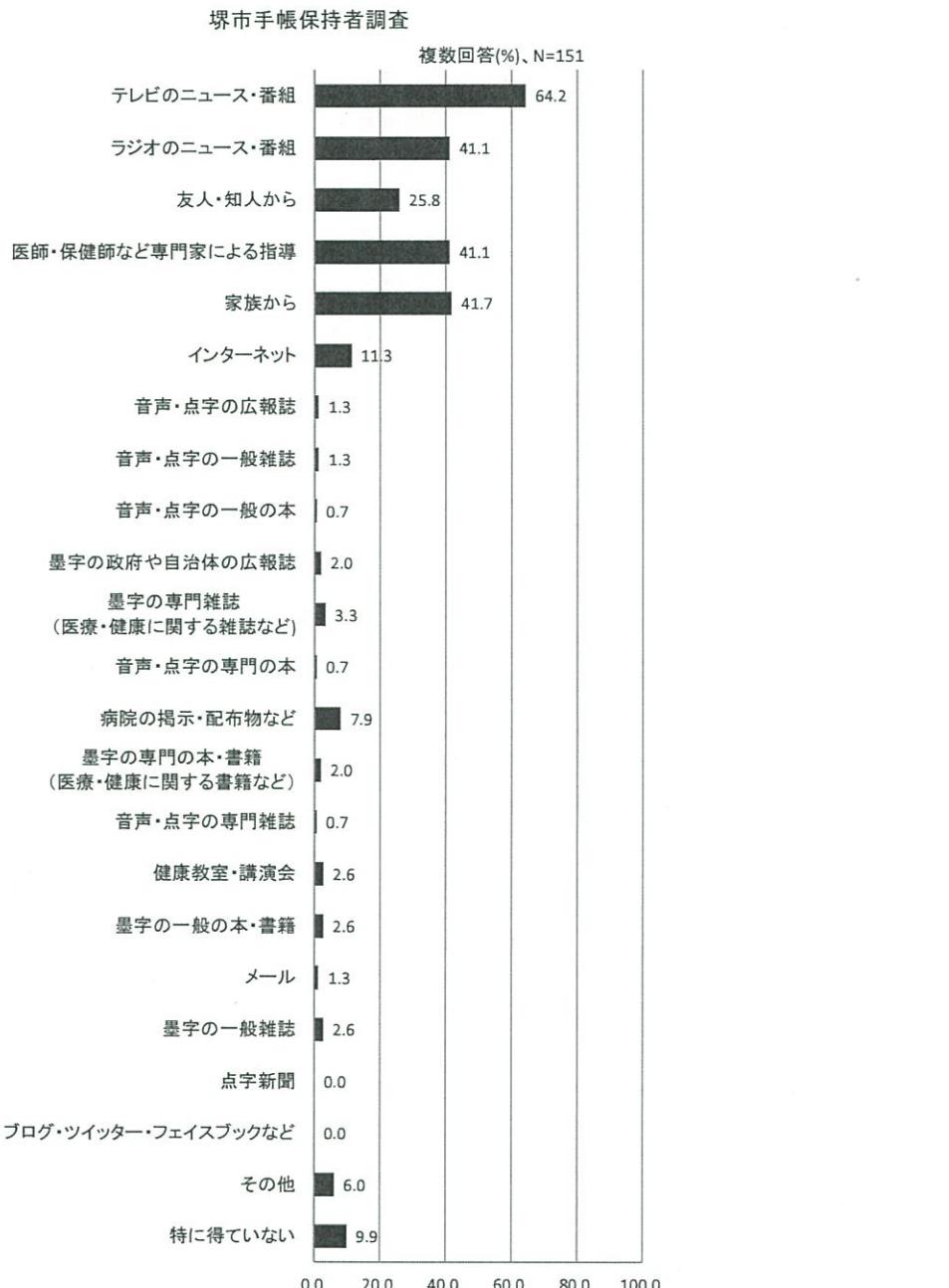
※1)身体的健康を示す

※2)精神的健康を示す

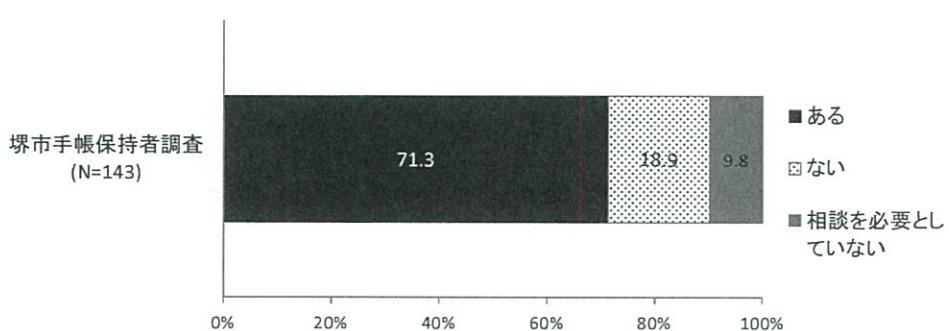
問19. あなたは、自分に必要な健康情報がある場合に、自分で見つけることができると思いますか。



問20. あなたは、ふだん、健康についての情報をどのようにして得ていますか。



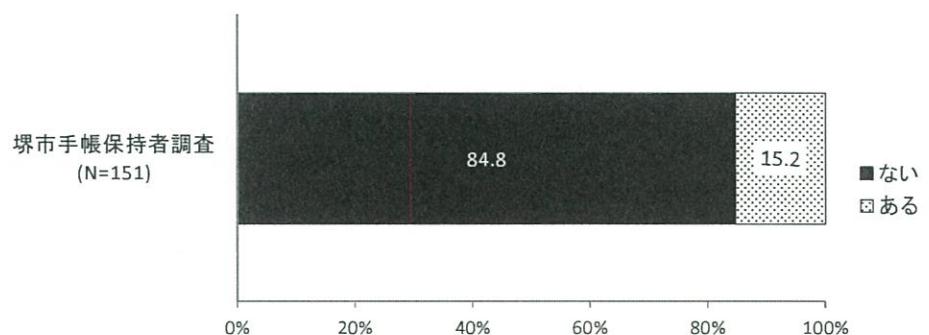
問21. あなたは、病気や健康に関する様々な疑問について相談できる場がありますか？



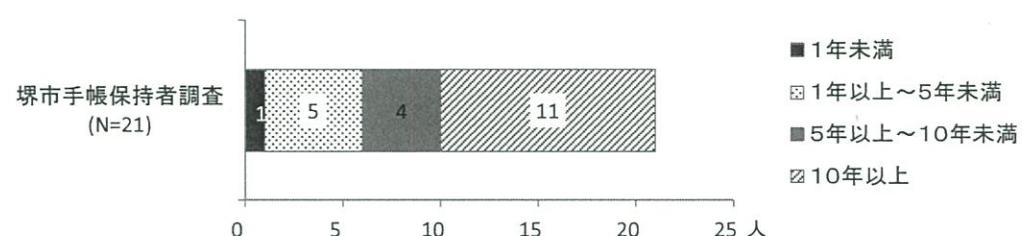


がんの経験についてうかがいます。

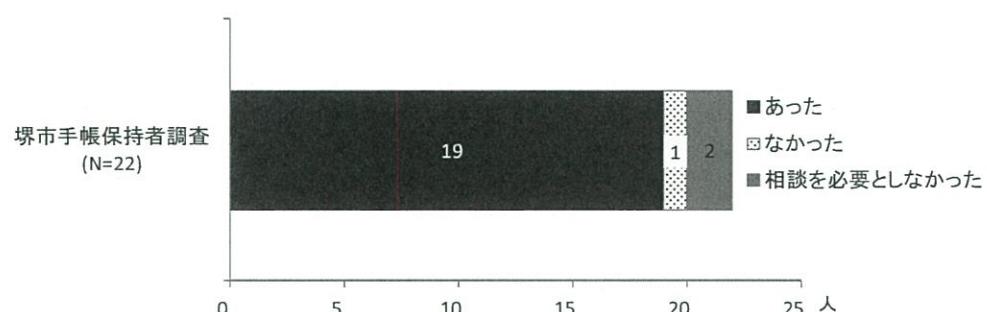
問 22. あなたはこれまでにがんと診断されたことがありますか？



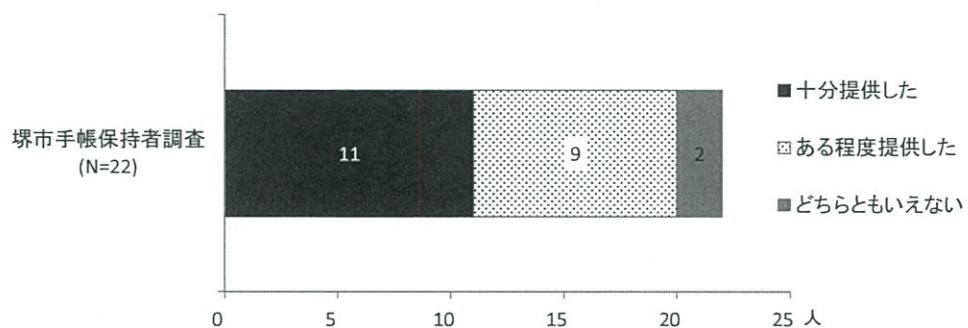
問 23. 診断されたのはいつですか。複数回診断されたことのある方は、直近の時期を教えてください。



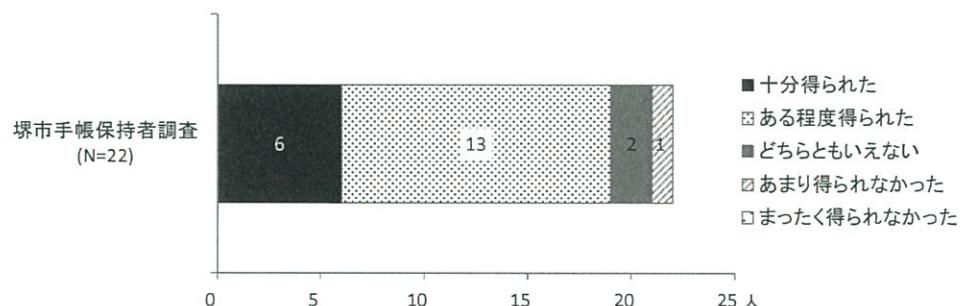
問 24. がんと診断されたとき、病気のことや療養生活に関する様々な疑問について相談できる場がありますか？



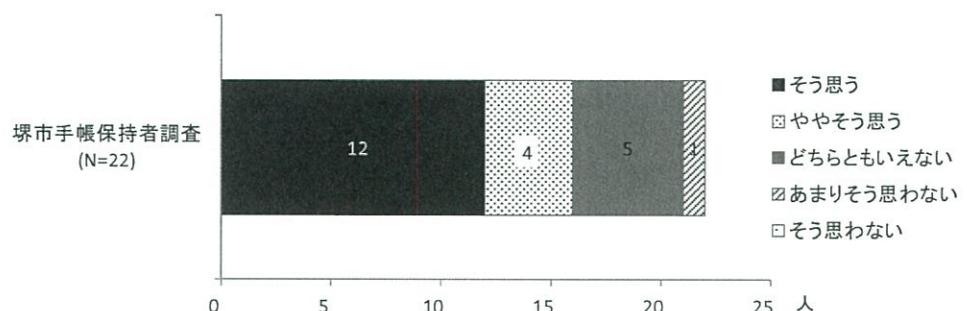
問 25. 「がんの治療」を決めるまでの間、医師、看護師、他の医療スタッフは、治療について、あなた（患者本人）が欲しいと思った情報を提供しましたか？（「がんの治療」には治療しないという方針も含みます。）



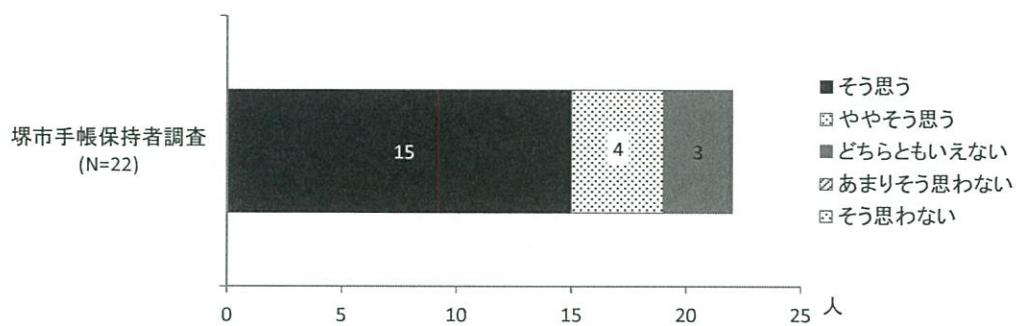
問 26. がんの治療を決めるまでの間、あなた（患者本人）が欲しいと思った情報を得ることができましたか？情報源は問いません（書籍・インターネットを含む）。



問 27. がんの診断から治療開始までの状況を総合的にふりかえって、あなた（患者本人）が納得いく治療を選択することができたと思いますか？

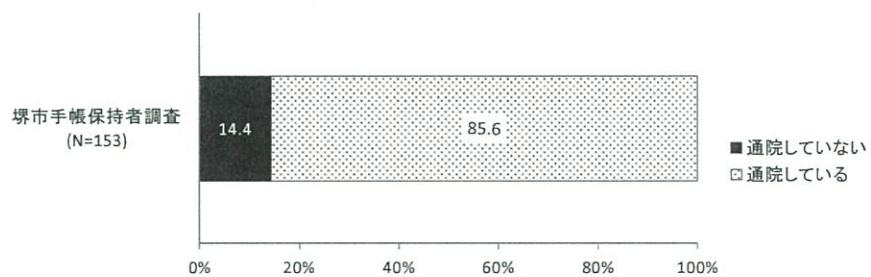


問 28. あなたが医療機関でがんの診断や治療を受ける中で、患者として尊重されていると思いますか？



ここからは再びすべての方に伺います。

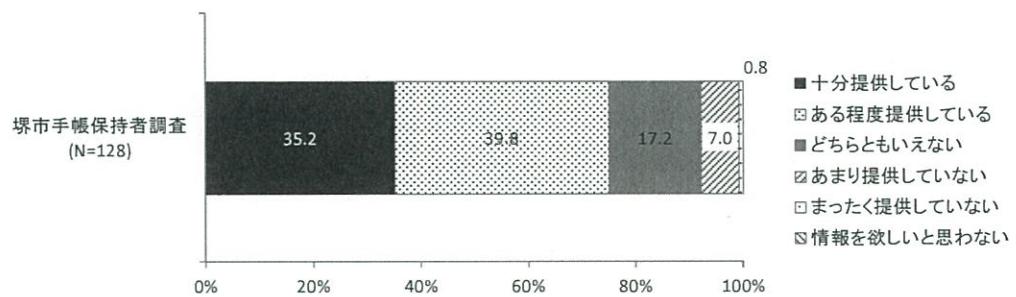
問 29. あなたは現在、がん以外の病気のために通院していますか。



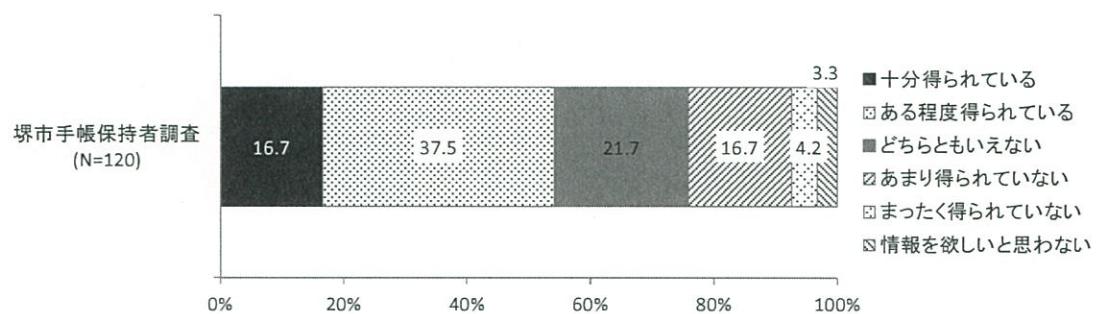
問 30. あなたが通院中の病気であてはまるものをお答えください。



問 31. あなたが受診している病院や診療所の医師、看護師やその他の医療スタッフは、その病気についてあなたが欲しいと思った情報を提供していますか？



問32. あなたは普段欲しいと思った医療情報を得られていますか？情報源は問いません（書籍・インターネットを含む）



問33. あなたが医療機関で診断や治療を受ける中で、患者として尊重されていると思いますか？

